

監修のことば

この本を読んだ時、これは馬を心から愛し、馬のためには可能な限りの最善を尽くす「馬と生きる」2人の女性、キャット・ヒル女史とエマ・フォード女史から産み出された珠玉の逸品であると心が震えました。

馬の毎日のケアや競技会でのグルーミングについては、馬に関する専門知識と科学的知識、経験、実績、そして共感力と感性が必要です。

「馬は大きくてもとても繊細な生き物である」とはよく耳にすることですが、その「繊細」さは感性だけではありません。馬は肉体的にも精神的にもとても繊細な生き物で、ほんの少しのことでトラウマを抱えたり、怪我をしたり、命を落としたりしてしまいます。それは馬が草食動物であるということにも起因しており、独特の消化器系のシステムを持つ難しさと同時に、元来捕食されてしまう立場の馬は、その大きさに関わらず「恐怖」や「ストレス」にとっても弱い生き物です。捕食される草食動物は恐怖を感じたら身を守らなければならない、身を守れないときには簡単に心臓が止まってしまう仕組みになっているのです（これはいつまでも恐怖を感じたり、痛い思いをしなくてすむようにとの神様のはからいとも言われています）。そのようにあまりにもはかなく命を落としてしまうため、ある程度の年数馬を管理している人間は皆、馬を送った経験があるものです。その心の痛い経験は何回しても慣れることは決してなく、何年経ってもその馬の存在が薄れることはありません。

生き物は皆素晴らしく、驚くべき存在ですが、馬の存在はその中でも格別だと常を感じています。その繊細な優しさ、魂の美しさから、霊格がとて高い生き物であるとも言われています。なぜ人はいつの時代も馬に魅了されるのでしょうか？なぜ馬は人を乗せてくれるのでしょうか？背中に鞍をしょって「乗ってください」と現れた馬はいません。すべて人が始めたことですが、馬は寛大にもそれに付き合い、たくさんの神経が通っている大事

な背骨の上に人を乗せて繊細な口にハミをくわえることを許容し、一緒に仕事をするを受け入れ、協力してくれているのです。そう思っただけでも涙がでるほどありがたいことだと毎日思い、愛おしくてたまらなくなるのです。その気持ちを、この本でキャットとエマと分かち合えたように感じました。

毎日のケアでは、馬にとって必要なこと、彼らに快適さや安心を提供できることは、明日やいつかではなく「今」できることを「今」する、「今に最善を尽くす」ことが大切であると、経験から学びました。競技会では、日々の協力関係で築いたパフォーマンスを披露し、彼らの本来の輝くような美しさ、気高さを存分に引き出すことが彼らへの最大の賛辞であると思い努力を惜しみません。そして、それらを実践するための選りすぐりのアドバイスがこの本には詰め込まれています。

実績と豊富な経験を持つ二人の素晴らしいプロのグルーマーがただでさえ忙しい日々の中、貴重な時間を割き、分かち合ってくれた大切なエッセンスを、日々のそして競技会での馬のケアに存分に活かしていただけたらと願っています。この本が確固としたベースとなり、その上にさらに知識と経験が積み重ねられたら、馬との心温まる素晴らしい関係が築かれることでしょう。

末尾となりましたが、本書の監修の機会を与えていただきました株式会社エクイネットの亀井伸明氏に心より感謝申し上げます。

すべての馬の幸せと関わる人の幸せを祈りながら……

TRC 乗馬クラブ小淵沢

仲澤 真里